

Ⅲ 耕地の利用状況

1 夏期における田本地の利用状況

(1) 平成22年夏期（おおむね水稲の栽培期間）における田本地の利用状況をみると、水稲作付田は165万7,000ha（青刈り面積を含む。）で、前年に比べて2万ha（1%）増加した。水稲以外の作物のみの作付田は42万8,500haで、前年に比べて1万1,000ha（3%）減少した。また、夏期全期不作付地は26万9,500haで、前年に比べて1万7,700ha（6%）減少した。

この結果、田本地に占める水稲作付田の割合は前年に比べて1.2ポイント上昇して70.4%、水稲以外の作物のみの作付田の割合は前年に比べて0.4ポイント低下して18.2%、夏期全期不作付地の割合は前年に比べて0.7ポイント低下して11.4%となった。（表13）

表13 平成22年夏期における田本地の利用状況

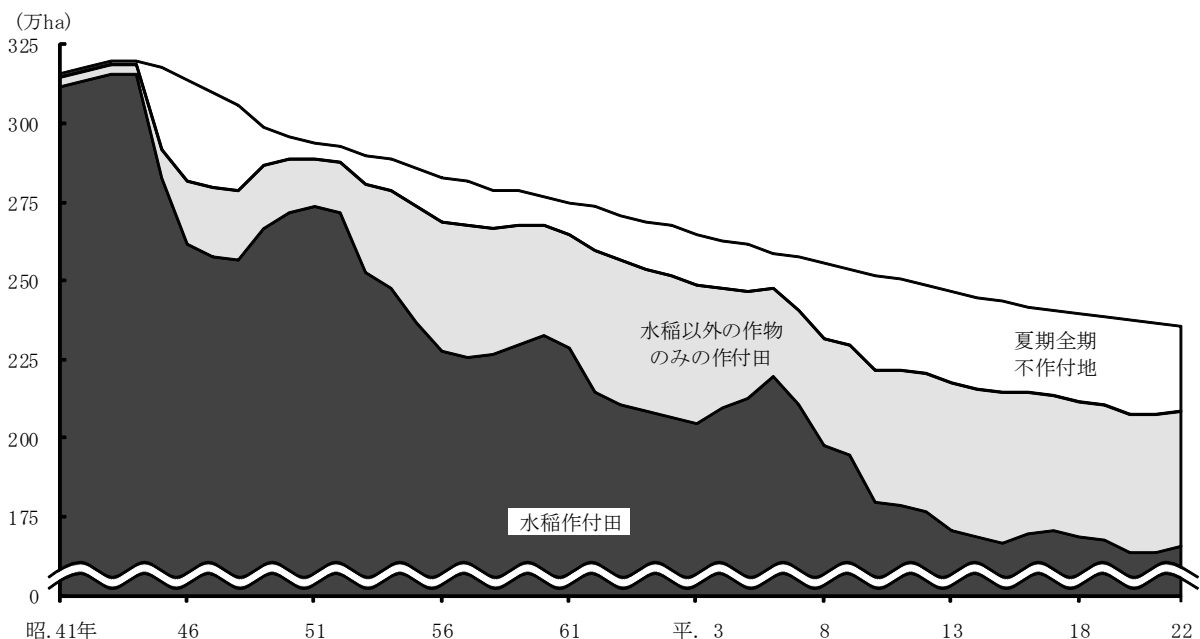
区 分	面 積	前年との比較		構成比
		対 差	対 比	
田 本 地	2 355 000	△ 9 000	100	100.0
水 稲 作 付 田	1 657 000	20 000	101	70.4
水稲以外の作物のみの作付田	428 500	△ 11 000	97	18.2
夏期全期不作付地	269 500	△ 17 700	94	11.4

単位 { 面積、対差 : ha
対比、構成比 : %

(2) 夏期における田本地の利用状況の動向をみると、昭和45年に米の生産調整が実施されて以降、米の生産調整面積の変動による増減はあるものの、水稲作付田は減少傾向で推移し、水稲以外の作物のみの作付田及び夏期全期不作付地については増加傾向で推移している。

(図12)

図12 夏期における田本地の利用状況の推移



2 農作物作付(栽培)延べ面積及び耕地利用率

- (1) 平成22年における田の農作物作付(栽培)延べ面積は230万3,000haで、前年に比べて9,000ha増加した。(表14)

これは、豆類等の作付面積が減少したものの、飼肥料作物、水稲、雑穀等の作付(栽培)面積が増加したためである。

田の耕地利用率は92.3%で、前年に比べて0.8ポイント上昇した。(表14)

- (2) 畑の農作物作付(栽培)延べ面積は193万haで、前年に比べて2万ha(1%)減少した。(表14)

これは、雑穀の作付面積が増加したものの、飼肥料作物、果樹、野菜等の作付(栽培)面積が減少したためである。

畑の耕地利用率は92.0%で、前年に比べて0.7ポイント低下した。(表14)

- (3) この結果、田畑計の耕地利用率は92.2%で、前年に比べて0.1ポイント上昇した。(表14)

表14 平成22年農作物作付(栽培)延べ面積及び耕地利用率

区 分	田 畑 計				田			畑		
	作付(栽培) 延べ面積	前年との比較		耕 地 利用率	作付(栽培) 延べ面積	前年との比較		作付(栽培) 延べ面積	前年との比較	
		対差	対比			対差	対比			
	ha	ha	%	%	ha	ha	%	ha	ha	%
作付(栽培)延べ面積	4,233,000	△ 11,000	100	92.2	2,303,000	9,000	100	1,930,000	△ 20,000	99
水陸稲(子実用)	1,628,000	4,000	100	35.4	1,625,000	4,000	100	3,050	△ 120	96
麦類(子実用)	265,900	△ 500	100	5.8	167,300	100	100	98,600	△ 600	99
かんしょ	39,700	△ 800	98	0.9	3,120	△ 160	95	36,600	△ 600	98
雑穀(乾燥子実用)	49,700	2,200	105	1.1	34,600	2,000	106	15,200	300	102
豆類(乾燥子実用)	189,000	△ 8,500	96	4.1	126,000	△ 6,400	95	63,000	△ 2,100	97
野菜	547,900	△ 3,900	99	11.9	145,700	△ 300	100	402,200	△ 3,500	99
果樹	246,900	△ 3,800	98	5.4	-	-	nc	246,900	△ 3,800	98
工芸農作物	166,600	△ 2,900	98	3.6	8,560	△ 130	99	158,000	△ 2,800	98
飼肥料作物	1,012,000	4,000	100	22.0	165,100	9,900	106	846,500	△ 5,900	99
その他作物	87,000	△ 900	99	1.9	27,200	△ 300	99	59,800	△ 600	99
耕地面積	4,593,000	△ 16,000	100	nc	2,496,000	△ 10,000	100	2,097,000	△ 6,000	100
耕地利用率	92.2%	0.1ポイント	nc	nc	92.3%	0.8ポイント	nc	92.0%	△0.7ポイント	nc

注：耕地利用率は、耕地面積に対する作付(栽培)延べ面積の割合である。

$$\text{耕地利用率(\%)} = \frac{\text{作付(栽培)延べ面積}}{\text{耕地面積(7月15日現在)}} \times 100$$

- (4) 作付(栽培)延べ面積の動向をみると、昭和40年代は麦類を中心とした水田裏作の減少や、45年から始まった米の生産調整による不作付地の急増により、田を中心に大幅に減少を続けてきたものの、49年以降は麦類の生産振興による作付回復等からほぼ横ばいで推移してきた。60年以降は生産者の労働力事情等により麦類、豆類等も減少し、平成10年からは米の生産調整の一環で麦類、豆類等の作付けは増加したものの、総体的には減少傾向で推移している。(図13)
- (5) 耕地利用率の動向をみると、昭和40年には123.8%であったが、その後も低下傾向で推移し、平成6年には100%を下回った。平成11年に昭和59年以来15年ぶりに上昇して以降、ほぼ減少傾向で推移してきたが、平成22年は10年ぶりに上昇した。(図13)

図13 農作物作付(栽培)延べ面積及び耕地利用率の推移

